

火星接近とアマチュア観測者

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-08-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 智雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00005917

火星接近とアマチュア観測者

三年 加藤智雄

来る6月24日には久振りに火星が地球に接近する。火星は、2年と2ヶ月ごとに地球に接近するが、今度の接近は地球との距離が6500万キロメートルで、1956年にある5600万キロメートルの大接近には及ばないとは言え大接近の部類に入ることは確かである。

この接近に際し火星の謎とされる二重運河の問題や、近年盛んになつて来た火星の気象学や物理学の研究が200吋の望遠鏡を中心に行われることと思われる。最近天文学に於ける研究は原子物理学の発達と共に新しい進歩が認められ、その研究は一段と躍進した。火星に対する研究は200吋望遠鏡の出現により写真観測の分野が開拓されようとしている所で、今後は大望遠鏡による写真観測が期待されている。

かかる時にあたり、アマチュア観測家の眼視観測を疑問に思う方も多いと思う。しかし火星を専門に研究する学者と各国に散在するアマチュア観測家とを比較すると、后者がはるかに多い。質と量とでは言えぬが火星面に起る変化をたえず観測するには専門家の数は少なすぎる。アマチュア観測家の観測は丁度気象学に於ける毎日の気象観測にたとえられるであろう。その一つ一つの観測には価値が少くとも継続的な火星面の観測は火星の謎を解く上に重要な意味を持っている。現在火星面の眼視的研究におけるアマチュアグループの活躍は特筆すべきものである。これは火星面の眼視的観測には大口径の望遠鏡が地球上を取り巻く大気により自由にその能力を発揮出来なことからアマチュアの中口径(10吋~15吋)の活躍を許す所となつたのである。

火星物理学の輝しき発展の陰にはこのようなアマチュア観測家の絶えざる努力が土台となつてゐることを忘れてはならない。